

SSS 英語多読

田 中 経 彦

要旨

絵本ないし Graded Readers の直読から始める SSS 英語学習法研究会方式の多読を 2 ヶ月実施した時点で、参加者12名中 9 名の読速が毎分100語以上（TOEIC600点取得者の平均読速）になった。TOEIC 高得点者（860点）から、400点以下の者（毎分60語から倍増）まで読速を改善し、多様な英語力の学生に同時に行える有効な進度別学習法でもあるらしいことが示された。

キーワード

SSS 多読, graded reader, 速読訓練, TOEIC, extensive reading

平成16年 9 月29日から、開始した「英語多読授業」（外国語センターパイロット講義）の現状と成果について、山口大学の卒業要件である TOEIC と関連づけながら中間報告する。筆者は英語教員ではないが、いろいろ事情があって「英語多読授業」をすることになった。この英語多読は、電気通信大学酒井邦秀助教授が主宰する SSS 英語学習法研究会及び日本多読学会の方式（以下 SSS 英語多読法と呼ぶ <http://www.seg.co.jp/sss/>）に準拠して行った。ちょうど 9 月上旬に山口大学からは「TOEIC を活用した英語教育」が文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に採用されたので、その初年度交付予算の貴重な一部で教材となる本600冊を購入し、実施したのである。3 年前、山口大学で TOEIC を英語教育に導入したのは、既存英語教育システム（特に単位認定面）に対する大胆な改革として、文部科学省も評価して、「TOEIC であれ他の何であれ、一般レベルの学生の英語コミュニケーション能力向上に結果を出せる英語学習システムモデルを創出する」ことを期待した予算交付ではなかろうか。英語学習において多読、多聴は必須なの

は常識である。多聴は随分、インターネットにより環境が整った。多読に関しては、英語に慣れさせ英語の処理能力を総合的に向上させると、多くの英語教師が効用を訴えて来た。が、多読は意思の強い秀才のみ可能なものと考えられてきた。その点 SSS 英語多読法のシステムは、普通の人でも途中で投げ出すことなく継続できるように工夫されている。「英語を英語として読めないから読まない。読まないから永遠に英語を英語として読めない。」という悪循環から抜け出せる。TOEIC では、受験者の大よそのコミュニケーション能力が分るということから、自発的な学習意欲を引き出せれば好循環が起こるのであろう。ただし、長文問題でもビジネスや日常の場面でありそうな内容が出題される。速読訓練をすれば TOEIC の点数は上がる。しかし TOEIC の問題に出るような長文よりはるかに長い原書を読む意欲（＝能力）を、TOEIC の高得点者が全員持っているかという点必ずしもそうではないようである。TOEIC の点数が上がれば「これでいいのだ」と満足せず、多読を試みて原書を次々読んでいく学生が一人でも増えて欲しいものである。大学の英語

教員の方々は、TOEICの点数向上が、就職対策だけでなく、学生が英米文化への関心を持つきっかけとなることを望んでいると思う。私の英語に対する理解は非常に浅いが、私もそうあって欲しいと切に願う。

1. TOEIC落第対策から多読授業開始への道

そもそもは保健学科の英語が不得意な学生が点数不足でTOEICを落第するのを防ごうと、インターネットで使える副教材を紹介しようとしていた。全ての学生が英語に関して恵まれた環境にあった訳でなく特にListening面についていけるか心配であった。昔短波ラジオで聞こうとしてなかなか聞けなかったVOAを、インターネットで捜すと、eigozai(管理人北岡俊彦氏:合資会社エデュコモンズ) <http://www.eigozai.com/> というサイトが見つかった。eigozaiはVOAの活用を訴え、補助教材や利用法について親切に説明している。サイト管理人の北岡俊彦氏は、創設以来関係していたTOEICの運営から離れた後、正統的な英語学習法と学習材料の紹介をインターネットで目指されている。TOEICを故北岡靖男氏と共に作った三枝幸夫早稲田大学元教授が、eigozaiに寄稿されている「英語学習の構造」によると、日本の中学高校大学の英語授業の実質的時間を合計しても1,000時間程度(英語のみ、訳読は除く)であり、英語が使えるようになるのに必要な学習時間約3,000時間近くには遠く及ばないとしている。毎日3時間勉強しても1年で1,000時間である。留学、英会話学校でそれだけ学習できれば越したことが無いが、自然な英語を多読、多聴して吸収することに励むのが、普通であろう。昔に比べればインターネットにより、多聴学習環境に関しては非常に進歩し夢のようである。例えば、Voice of Americaが普通の放送だけでなく台本付きの

音声教材を無償で提供している。普通の発話速度のニュースが聞き取りにくければ、VOA Special Englishというゆっくり目の毎分100語の発話で易しい語彙で編集したニュース、トピックスがあり、無料音声ファイルを自分のパソコンに保存できる。VOAは台本付きだから多読にも使えるが、原書を通読する力をつけるにはせいぜい15分程度で短い。北岡俊彦氏に紹介されたのが、SSS英語学習法研究会の多読法(以下SSS英語多読法と略す)であった。北岡氏の言では、一般の多読は「言うは易く行なうは難し」であるのに対してこれはかなりの人が実行可能の様だとのことだった。SSS英語多読法は酒井邦秀電気通信大学助教授(日本多読学会会長)が工夫した多読法である。酒井助教授がまとめた多読3原則①辞書を引かない②わからないところは飛ばす③つまらなくなったら止めるに従えば誰でもペーパーバックが読めるようになる。正確に言えば「読み通すことができるようになる」であろうか。いろいろな本を読み通していくとそのうち単語の意味が浮かび上がるというのである。対して「分らない単語は推測してから英和辞書をこまめに引け(それと単語の意味をすぐ忘れるな)」「分かるまで考えろ」「つまらなくても辛くても我慢して最後まで読むのが偉い!」が精読3原則か訳読3原則になるだろうか。精読3原則でペーパーバックが読める我慢強い人達は当然いる。では、多読3原則でいきなりペーパーバックが読めるかと言うとそれは普通無理なので、非常に易しい本から、読むのも特徴である。絵本、Graded Readers等を使う。そして徐々に本のレベルを上げて100万語200万語と読んで行くと、ペーパーバックが読めるようになる。極端な例では、SSS英語学習法研究会の古川昭夫氏(大学進学塾SEG代表)によると、中学1年生の塾生が2人、学年末にHarry Potter等のペーパーバックを読むようになったという。SSS英語学習

法研究会のメンバーとの意見交換と、多読実行者の相談に応じるインターネット掲示板 <http://www.seg.co.jp/sss/> には、社会人が、英語がすこぶる不得意であった人も、英語を習えなかった人も本の語数合計100万語1,000万語の読破報告がされている。英検1級、TOEIC 高得点者も参加している。この多読法を自分でも試し効果を確認し、保健学科の学生にも本を貸し出していたが、大学全体の英語教育でこの多読を取り入れてもらうべく運動した所、山口大学の英語教育を総括する岩部浩三大学教育センター主事の下承を得て、渡邊正大学教育センター長から幸運にも予算を分けていただけることになったのである。

Graded Readers：英語を習う外国人が多読して英語に慣れるために作られた本である。一番易しいレベルでは語彙を200位にとどめ、現在形、現在進行形しか使わない。語彙と文法のレベルで数段階に分けている。内容は、童話、小説のダイジェスト版、創作など様々で、従来スペイン語圏の国でもっとも売れていたが、現在は日本が世界で一番の御得意様だそうである。

2. TOEIC と真のコミュニケーション能力

TOEIC については、山口大学の TOEIC 教科書を作られた宮崎充保国際センター長が大学教育創刊号 P 57-80 (2004) にすでに詳しく説明されているが、読者の便宜のために簡単に再説明する。TOEIC は、Test of English for International Communication の略称で受動的な英語能力 Listening と Reading について990点満点で試験する。40代以上には懐かしいアポロ月面着陸中継の同時通訳者の一人、鳥飼玖美子立教大学教授が、TOEICの創始者 故北岡靖男氏に生前聞いた所によると、英語を使う仕事につくには、採用試験時に TOEIC700点程度は必要だと会社は考えているそうである。他に見所があったとしても

700点に及ばない人をその向きに育成するには、とてつもなく費用と時間がかかるとわかつたらしい(講談社現代新書「TOEFL・TOEIC と日本人の英語力、資格主義から実力主義へ」)。英語で十分コミュニケーションできるようになるには、英語と接触した時間が千時間二千時間三千時間というスケールが必要だとされる。一日3時間英語に接しても、1年で千時間である。英語はスポーツ、芸事と同じでトレーニングの繰り返しが必要である。時間がかかる。就職して学生時代ほど時間が取れるはずが無い。基礎を築くには、費用対効果が悪すぎるということであろう。とは言え某国際大企業では、TOEIC 点数は参考にするが、Native Speakers による面接試験を重視するようになっていて聞いた。800点を越してもしゃべれない本が読めない人もいるからである。700点を越すという意味は何であろうか。730点を越した受験者は、別に開催される Speaking の試験 TOEIC Language Proficiency Interview (LPI) の受験資格を与えられる。訓練された Native Speaker が20分インタビューし、その録音をさらに第2の Native Speaker がチェックして最初の評価員と評価が合わなければ、第3の Native Speaker が録音を聞いて判定するといった評価方法である。TOEIC の日本での運営組織、国際コミュニケーションの解説によれば、5段階のレベルの内、レベル3に評価される Non-native speaker は極めてまれだそうである。最高レベルは高等教育を受けた Native Speaker に相当する。TOEIC は、「最低限730点を取れないのは英語の基礎が不十分であって読む、聞くの学習をやりなおさないと LPI の受験は無意味」と考えていると鳥飼教授は指摘している。英語の処理速度が上がっていないと言うことである。鳥飼教授は、読み飛ばし式の速読などの重要性とともに、真のコミュニケーション能力をどんな試験であれ測りきれものではないと指摘してい

る。テストで測れる英語能力とともに知識が不可欠であると指摘する。誰であれ大学の英語の先生であれば同じ御意見だと思ふ。知識といっても、人に選んでもらった知識か、多読、多聴で得た知識、どちらが価値あるかという点もある。前者は科挙の受験者のために、宋の皇帝だったか、これを読めば科挙に合格できるというテキストを編纂したのだが、似たりよったりの進士ばかり出て、官僚の墮落、王朝の滅亡を招いたという史実を思い起こさせるのである。

3. 多読すれば速読できるようになる

公開されている資料をみると山口大学15年度入学生2,022名中 TOEIC 600点以上到達者は109名(約5%)である。TOEIC 準備授業を2月受けて、6月の初旬に受験するが、入試偏差値の高い医学科、獣医学科等の平均点が高く600点前後である。TOEIC のトレーニングをしている会社 ICC のホームページでは600点取れるには、訳さずに毎分100語以上で文章を読めることが必要としている。<http://www.icconsul.com/> (丸善「TOEIC・TEST 英語学習ダイアリー」鹿野晴夫)。TOEIC は、語彙や文法の力より先に、英語の運用能力が問われている。設問は早い英語を聴き取り、訳さないで早く読まないとい多数の問題を全部回答できない。しかし800点取っても、話せない、本を読めない人が出てくるのである。一方、英語が満足に出来る人(大学の英語の先生など)は、TOEICの点数が例外なく900を越えるし、ある英人教授が「TOEIC, TOEFL を9割取るのはイギリス人でも難しい」と語ったというがイギリス人なら8割は取れるのであろう(講談社アルファ新書「日本語ができれば英語もできる」角行之著)。TOEIC 点数がある程度高いことは、英語ができるという状態の一部分であり、その人の英語力が当人や関係者にとって、と

りあえず満足な状態とは限らない。山口大学学生にとって、速読訓練は TOEIC の点数アップに要り、多読は英語で交流する素地を作るのに要ると言えよう。多読は英語文化を効率よく学習者に INPUT するからである。さらに多読には、多くの人にとって退屈な速読訓練には無い楽しさが得られる。学習者を何とかコミュニケーションの取れるくらいに状態に届かせるのに何が一番効率よく安上がりであろうか。インターネットで無料ないし安価に音声教材、視聴覚教材、携帯音声再生機器が手に入る昨今ではあるが、初期段階においては多読を優先させた方が有利だと SSS 英語多読研究会では言っている。耳で聞いた音が完全に把握できて、再現できれば問題ないが実際にはそうではない。印刷された文は確実に目の前から消えない。場所も選ばない。発語の速度を調整できる再生機器等も登場しているが、本は手軽に自分の速度で読める。あるいは、発語の速度上限を上回る速度で読めるようになる場合もある。十分舌がすべらなくても聞き取れなくても英語が早い速度で吸収できる。ともかく日本の大学生が中学から大学入学時まで触れる英文の量は語数にして10万語(多くても)もないというのが、SSS 英語多読法の指摘である。少ない英語の知識をフル回転させて頭で作文して応答することが果たして適切であろうか。たくさんの自然な例に触れて、それをすなおに吸収するのが結局は早道とするのである。多読100万語、200万語と目標を取り敢えず設定して多読すれば、英語の力をつけていく過程でこなしていかなければならない英語に接した時間を能率良く埋めていける。音声教材より本は圧倒的に多様で、個性に合わせて選択の範囲が広い。興味の持てる本を選べれば、多読に耽って行くだけで英語に接する時間が積もって行く。何より自学自修がしやすい分野である。別に多読をしなくても、TOEIC で730点以上を取れる人がいるのは確かである。今回

多読を始めた860点（理学部1年次に取得）の人も、NHKのラジオ講座を聞き続けてきたが、ペーパーバックは読んだことがないとのことだった。多読に使う本が幼稚だと言って結局参加しなかった915点の人（医学科1年次に取得）も、多読したわけではない。二人とも帰国子女ではないが、読速は2人とも早く、それぞれ毎分225語と毎分360語であった。山口大学ではTOEICを受験する前にTOEIC準備講義で、TOEICのスピードについていけるように自学自修訓練するが、この二人がいつスピードを獲得したかは知らない。カナダへ1年留学していた4年生（TOEIC 800点未満、TOEIC準備講義未受講）は自分なりに多読していたが毎分130語であった。この人は、留学時あとからやってきた韓国の中学生が、それこそハリポッターなどを自分に比べやすい読んでしまうのを目撃してしまった。速読訓練だけでTOEICの点数アップはできるだろうが、誰でも速く読めるようになる訳ではないように感じる。多読が読速をどう向上させるかは興味深い。また、英語でコミュニケーションをとるときせいぜい数分で読み終わる文章だけ読んでいて、実際のコミュニケーションの長丁場に耐えられる持久力がつくであろうか。多読授業開始2月後の12月初旬、今回の多読授業のために読本600冊の購入費を予算化して下さった渡邊正大学教育センター長に、報告をまとめるように言われたので、あわてて簡単なアンケートと読速の測定を参加学生に依頼した。すると860点の学生の読速は多読後、さらに早くなっていたのである。点数の低い学生も遅い訳読モードから直読直解の読速が2倍になり、Native Speakers並みの読速毎分200語に到達していたのである。母数が少なく、傾向しか言えないが、興味深いデータと思うので報告する。

4. SSS 英語多読法の状況

今回行った英語多読は、酒井邦秀電気通信大学助教授を中心とするSSS英語学習法研究会及び日本多読学会の方式、ノウハウに従っている。SSSとは、Start with Simple Storiesの頭文字を取っている。いきなり大人用の本を使うのではなく、その時点で読みこなせる絵本、レベル別読本（使用語彙を段階的に増やす外国人対象の読本）、英米の小学生用副読本（絵本に近い）から読み始め、（それまでの英語成績の良い者に取り、早く読み進めたいのは人情であるが）あえてレベルの低い所から読み進める。会員が数えた本の語数を、参加者が加算して行き、取り敢えず100万語、200万語と読むシステムを整えたのが、前述の古川氏である。なぜ100万語200万語かと言えば、個人差もあることであり、励みになる区切りということである。しかし、10万語と桁数が違う読書量の効果は大きいことは明白であろう。この多読授業は、酒井助教授の電気通信大学を始めとする大学（都立大、成蹊大、平成国際大、順天堂大、道都大、関西大、大分県の看護大学など）、工業高等専門学校（東京、大分、浜松、沖縄）、中学、高校で行われているが、国立大学で全面的に採用している大学はない。選択と言う扱いである。千葉大学の先進科学教育センター（高校2年修了で学生を飛び級入学させる受け入れ機関）にも、課外用教材として設置されている。SSS多読以外にも多読運動に取り組んでいるグループがある。独立に個人で似たような方法で多読をしていたひともいたと思われる。最近では米南加大・Stephen Krashen教授が“Extensive Reading is the only way to language acquisition.”と主張している（Krashen教授のextensive readingの理論を参考に日本でも各所（四天王寺国際仏教大學Mason教授など）で多読の試みが行われているらしいが、詳細は知らない。）。また古く

は夏目漱石も『現代読書法』(明治39年)で多読乱読を勧めているそうである。
<http://www.seg.co.jp/sss/information/sousekitadoku.html> ももちろん唐土の孔子様も繰り返し読めば意味が分かっていくことを説いている。もっともこれは難解な文を繰り返し読むことだが。それはさておき、いつの間にか多読は、上級者が武者修行に出る類と考えられ、初心者には無理なように考えられるようになったが、上述のように多読を行えば初心者にも英語を苦手とする者にも可能である。SSS 英語学習法研究会のサイトを閲覧してもらえれば直ぐ分かるが、多くの社会人がこの方式で100万語以上の多読をしている。学生時代英語が、低空飛行であった人、事情があって中学で英語を習えなかった人達も参加して多読し、継続している。TOEICが900点以上、英検1級といった人も、参加して、簡単に自然な表現が身に付くと報告している。極端な例では、中学1年生が、ペーパーバックを読むようになったと言う。従来、大学を卒業した時点でペーパーバックを読めるようになった人間が何%だったろう。筆者が下手な要約をするよりも、ちくま学芸文庫「快読100万語!ペーパーバックへの道」酒井邦秀著を読まれない。

筆者も実は100万語以上読んでいます。ともかく筆者も多読をしてみて、多読授業ないし多読本の購入を提案したのである。多読は昔から英語の上達に必要な不可欠とみなされてきた。栄養学で言う三大栄養素、蛋白質、脂質、糖質及びビタミン、ミネラルに当たる。薬が本当に効くかどうか、偽薬を投与する対象群を作って薬効を検討するのと、栄養摂取とは根本的に違うはずだから、報告のために対象群を作る気は全然なかった。もっとも多読を卒業までしなかった学生は自動的に対象群となる。今回は、メディア基盤センターの一斉メール送信システムを用いて、英語多読を、

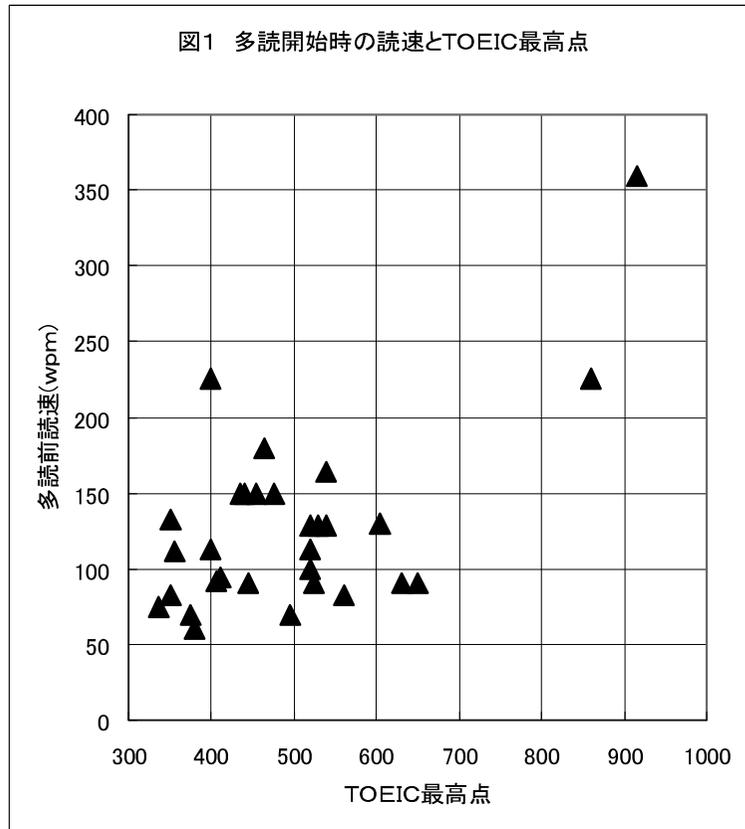
全山口地区学生と保健学科学生に呼び掛けた。人数オーバーになったらどうしようかと無用な心配もしたが、高得点者から英語の苦しい人まで適正規模の人数が集った。数回メールした。「ウザイから、メールを送らないで下さい。スパムで訴えますよ」という抗議もあったが、今回これだけ人数を集められたのは大学にこういう教育支援システムがあったからであろう。なお、多読講義を初めてから知ったのだが、工学部図書館には宮崎充保国際センター長が在籍した頃に購入したOxford Bookworms というレベル別読本が130冊位あり、Farrar 講師(非常勤)が工学部2年生前期に英語リーディングとして多読を指導されている。ただし、読本の巻末問題等を利用して学生に質問されているようだ。継続率の高いSSS方式だともっとみやすい本、他社のレベル別読本も揃えて、読む本の選択の範囲を広げて、レベル間の移行に伴う勾配をなだらかにして、「問題はしない」。問題に答える時間があれば別の本を読み始めたほうがましであるからである。

5 . SSS 多読法実施の効果

多読の効果が出るのは遅い。しかし、ジャパンタイムズ編集局長伊藤サム氏が運営サイト「伊藤サム英語の世界」
<http://homepage1.nifty.com/samito/> で「訳読精読方式では確かに、多読より早くある中級レベルまでいくが、そこから先が伸び悩むのに対し、やさしい多読は上級レベルを目指すのにかかせない。」と書いておられる。難しい文章ではなく、やさしい文章をたくさん読まないと output の訓練につながらないと断言されている。時間がかかるのである。ジャパンタイムズの新人記者には背丈の2倍の易しい本を読むように指示されているそうである。

とは言え、予算のため2月の間の変化報告が必要となった。2月間の間で何が変わったかと言えば、8割がたの参加者の読速が上がった。TOEICを受験するための準備講義で大部分の学生が出来ていなかった速読を、多読が向上させているようだと言いたい。読速は、どれだけ早く英語を処理できるかを反映している。訳読ではせいぜい毎分75語でしか読めない。聞くときも訳しては、毎分150から200語で普通に話されて分るはずがない。まず図1を見ていただきたい。TOEICの

最高点数と多読開始前の読速の関係を示した。3年生8人、2年生11人、1年生11人、計30人のデータである。宇部の医学部学生を加えて例数を増やしている。全員一年次前期にTOEIC準備講義を受けている。読速はペンギン社のFlying Homeという現在型だけで語彙200、語数900の物語を読ませ測定した。読ませる前に、一行当たりせいぜい3回くらい目を動かして、直読直解していくように説明した(日本実業出版社「今日から読みます英語100万語」古川昭夫・河手真理子著、酒井邦秀監修)要領を説明する前の読速は測っていない。要領を説明してもTOEICの低い人は、一人の例外を除いて読速が毎分200語を超えていない。筆者も多読をしているので分るが、「慣れないと早く読もうとしても読めない」のである。SSS英語多読では毎分200語を超えれば英語に慣れている者として、



特に指導はしない。全学年を合わせた相関係数は0.60であった。これで英語レベルのクラス分けは、少し無理なようであるが、高得点者は確実に読速が早い。TOEICを最後まで読むには毎分200語のペースが必要とされている。TOEIC準備講義では、現在、発声速度毎分150語の音声教材が提供されている。速読の要領も、数百語の長さの「長文」教材を使用して指導されているはずであるが、毎分150語を超えたのは30名中9名であった。長年TOEICを受験するための学習指導をしている鹿野氏(前出)によると、TOEIC730点以上取るのに必要なのは毎分150語である。同様にTOEIC600点以上を取るのに必要と言われる毎分100語を超えたのは30名中18名(60%)であった。現実にはTOEIC600点以上を取っているのは30名中5人(20%)である。では多読は、読速にどう影響したか。

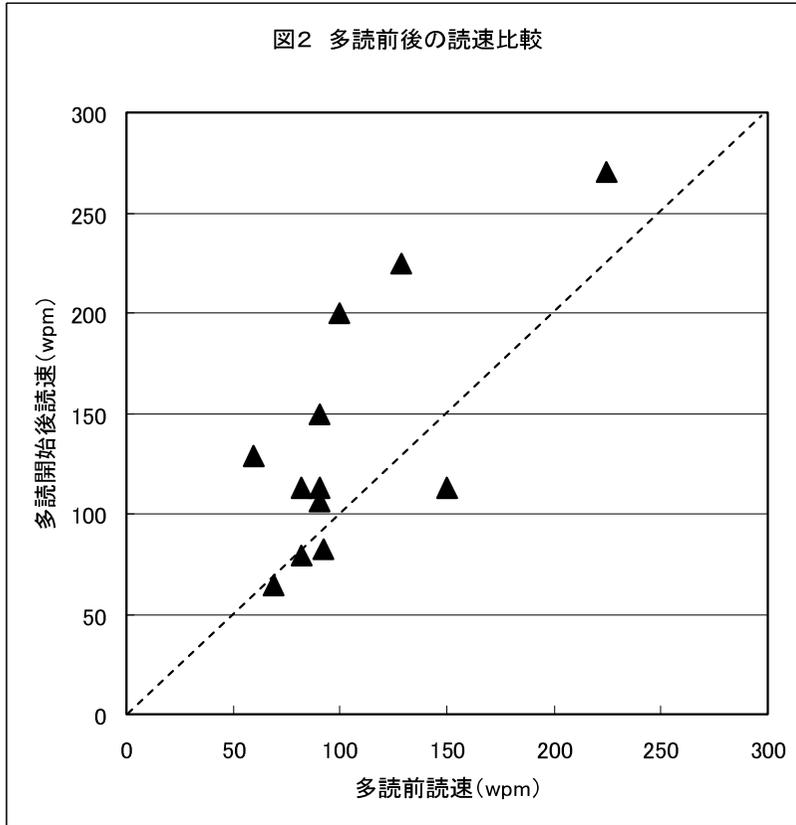


図2は多読前と多読後の読速を比較である。多読2ヵ月後、同じ文章を読ませた。860点の高得点者から300点台の人まで12名中8名(66%)の読速が向上していた。図1に比べ総人数が減っているのは、(12月末現在来なくなった者、医学部保健学科でもしている多読参加者と読速を報告してくれない者)の人数が差し引かれているからである。ちゃんと報告してくれた者は12名である。毎分100語以上は多読開始前が12名中4名(33%)だったのが多読後は12名中9名(75%)に増えた。点線で表した対角線より上にある者の読速が向上している。毎分225語から270語に伸ばした860点の高得点者と毎分60語から130語に伸ばした380点の者まで伸びている。毎分150語以上の者はTOEIC 500点以上である。速度がほとんど変わっていない者3名がいるが、TOEICが400点以下であり、英語への接

触量が今まで少なかったせいと推定する。さらに、ここには示していないが、毎分225語から600語以上に躍進した例もあった。TOEICは400点だそうで、読んでいるのを観察すると、ぱっぱと視線を動かして読んでいる。Harry Potterを読んだ中学1年もそれくらいの速度で読んでいるようである。ただこればかりは本人の感覚なので、好きなようにさせるしかない。慣れの効果がある

とも言えようが、目の動きが早くなるのは確実である。筆者自身、告白すれば最初毎分180語だったのが、多読後、毎分250語になっている。やりすぎると目が勝手に横に動き出すので、縦書きの文章を読むのに苦労するくらいである。とにかく多読は上級者から初級者まで読速をあげるのに効果があるのは明らかのように見える。他の要因があるのかは調べてはいないが、そもそも多読して効果がないはずがなからう。ましてや逆効果になるはずがない。同時に、アンケートで英語の本を読んだ効果について尋ねると、読速が上がらなかったTOEIC 400点以下の学生以外は肯定した。860点の学生も楽しかったそうである。肯定しなかった学生でも英語になじめるようになったと答えている。使える語彙の問題はあるがわずか2月間で、履歴書に書けるTOEIC点数600点以上を取れる基盤ができ

た、あるいは感覚を知ったことになる。一方、中学高校の英語教師の研修会で、SSS 英語学習者研究会員が多読を紹介した際、同じように読速を測ってもらったら、8分以上（毎分110語）かかった方々が半分いたそうである。たまたま読速が遅い悩める教師が多数参加していた可能性もあるが、TOEIC を活用した前述の鹿野氏の主宰する民間教育機関でも、教師向けの速読教育プログラムを提供しているのである。『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想によれば、今からの中学高校の英語教師の目標値として TOEIC であれば730点（読速毎分150語）だそうだから特殊例ではないのだろう。また、山口大学の TOEIC 受験用教科書を編纂された宮崎充保国際センター長は、かねてから多読セミナーを学内で開いていた。多読が上級者への路だからである。しかし、継続する学生がなかなか出なかった。だから多読3原則の SSS 英語多読を支持して下さった。今回の反省点としては、TOEIC 低得点者を失速させはしなかったかということである。英語難民の自分が100万語読んだのだから、誰でも読めると思っていたし、TOEIC 点数を予め調べていなかった。自分で読んだ本の内容も冊数が多すぎてとても頭に残らず適切な本をすすめることなどできなかった。厳密に言うと、SSS 英語多読授業方式からはかなりはずれていると思う。それでも、本だけ借りに来る学生を含めると、30人以上は継続している。多読講義最終日は、出戻りさん、新規の学生を含めて25名の参加であった。予想以上の成果と感じている。さらに筆者の所属する保健学科でも、筆者の所蔵本を教室に置いて多読を呼び掛けている。専門英語を教えている同僚の話によると、多読をしている学生は読速が上がり、楽に読めるようになったと言っているらしい。また、昨年度、多聴（数ヶ月）と多読（2月間）をした3年生が、TOEIC の点数をそれまでの450点から600点に向上させてい

る。卒業要件の400点を通るのに、直前、多読にだけかけて通ったという者もいる。だが、どれだけ継続しているか把握していない。一人で多読をするというのは、なかなか難しいのかもしれない。保健学科でも週一日学生を集めて多読させる時間を作る必要がある。読速の測定、アンケートに全員協力的とは言えない。学生も忙しい合間に多読に参加しているので、責めるわけにもいかない。すでに多読の効果を信じているから、時間が惜しいのである。

酒井先生は、ストップウォッチを持って学生の読速を監視する。読む速度が遅ければ、本を易しい本に強制交換する。オーバーペースによる失速も警戒する。筆者が、多読をさせている部屋は、図書室みたいでストップウォッチによる計測はしにくいのでしていないし、同日に講義2コマを別に抱えているのでそこまで手をかけられなかった。レベル0のレベル別読本で読速を計測させ、自覚させ、方針を立てさせた。語数は900位で、4分以内（毎分230語以上）に読めたら、英語に慣れているとみなされ、学習計画も自由に立ててくださいとなる（SEG 出版「読書記録手帳」古川昭夫著）。本は、毎分200語で読めればそれに越したことはないが、普通楽しく読めるのが毎分120語から150語である。自分のペースで読めと言うことである。毎分100語以上であればレベルを上げて良い。毎分80語以下だとレベルを下げる。上げ下げは自分の感覚で行う。本文、序文を読むだけ、巻末の問題練習、レポート提出などはせずにひたすら読み続ける。集中力が落ちたら無意味なので、他人をじゃましない限り何をしても自由である。文法学習は SSS としては、多読をかなりした後、“Grammar in Use” ケンブリッジ大学出版で整理することを推薦している。また学校の場合、多読開始1年目で20万語読めた生徒は、次年度に100万語を読めるとい

経験則を得ている。3月末に多読のノウハウを詰め込んだ「教室で読む英語100万語」「100万語多読入門」と言う本も出版するようである。音の方は、英文なしでシャドーイングを行い、カタカナ音を本来の英語の音に矯正する。昔自分も出鱈目にやったことはあるが、発音のチェックを筆者が俄仕込みで指導できるはずも無い。これは自分の守備範囲を超えているので、ここから先は学生に選んでもらうことにした。筆者には斬新に思える発音指導「UDA式30音練習帳」鶴田豊著を紹介することにし、さらに、TOEICの創設に関与された三枝幸夫早稲田大学元教授の発想に基づき、北岡俊彦氏が昨年11月から運営開始したVOA Study-Net <http://www.voa-study.net/index.htm> を勧めている。Special EnglishをDictation素材にし、聴き取った文を入力するとWEBを通じて自動採点される。3段階の構成で、ニュースのヘッドライン1文を書き取る1段階目が2分以内にほぼ完璧にできるようになったらTOEIC450点以上相当、1つのニュースを述べる数文を書き取る2段階目が終わったらTOEIC650点以上相当、複数のニュースを1時間以内に全部書き取る3段階目を越えられれば、TOEIC800点以上相当と判断できる。このTOEICの点数はあくまで目安であるが、正誤問題を見ていくより、多読多聴して自然な正しい英語だけを聞きながら、このように時々、聞き取れない所をチェックしていく方が自然な学習法と思われる。自分のTOEICの点数がどの段階を超えたか判れば、学習の助けになるであろう。TOEICの受験回数を控えて、原書購入に予算を回すことができよう。後は学生を選択に任せる以外にない。

6. 多読を普及するための提案

学生に多読をさせて予想以上の成果を短期間で報告できたのは幸いだったと思ってい

る。多読は有効な英語学習法で、これからの大学英語には必須な方法論だと信じる。このまま暴走して意見を述べさせてもらえば、中学高校において、多読させるように大学は運動し、英語入試なども再構築していく必要がある。酒井助教授やジャパントイムズの伊藤サム氏は、文部科学省の中等教育分科会の意見募集に投稿して、中学高校に「やさしい英語多読本を配備すること」や、「中学の教科書にCDをつけること」(講談社「英語はやさしくたくさん」伊藤サム著)を提案されている。もし実現すれば、大学で本来行われるべき高次元の英語訓練への移行が可能になる。大学入試センターのリスニング試行テスト <http://www.dnc.ac.jp/> では、発音の速度は150から180語でTOEIC並みだそうである。高校生が3万5千人受けて、平均点は6割ちょうどになっている。内容はそれほど難しくないようだが、掲示板で教えてくれた英語の先生の話だと、毎分100語以上で読める高校生は稀だということである。読める速度より早い速度の英語が聞き取れるということはありえない。多分今の大学生に聞かせて、聞き取れる人がどれだけいることか。多読が普及するきっかけとなるかもしれないとのことだったが。

他大学を探索してみると、いろいろ話題の首都大学東京では、一時、英語を含めて必修単位が全てなくなると聞いていたが、山口大学と同じように、入学時のレベル分け試験である点数取れば英語授業の免除＝自学自習に落ちついたらしい。山口大学では、6月のTOEICがクラス分けというか、前期後半の授業免除になる。英語教員は指導が必要な学生に集中するということである。高得点者であれば、自学自習が多読多聴の方に向いていくはずであるが、400点そこそこの学生を授業免除して、勉強を続けるのか。要は個人のやる気であるが、大目標がないと継続しない。

1年で600点近く取っても、3年では150点近く下げたということになる。SSS 英語多読のように楽しいことは継続できる。多読用読本を学生の利用しやすい形で提供することは、このような隙間を埋めることにもつながる。今回、文部科学省から「特色ある大学教育支援プログラム」として山口大学の「TOEICを活用した英語教育」が採用されたのは、TOEICと限らず英語教育全体に対する改革を率いる旗手として山口大学が期待されていると思いたい。さて、TOEICの点数を短期間に上げるのに、教員が選別したエッセンスを与える方式は有効であろう。読速を上げるのに多読が有効なのは間違いないようであるが、エッセンス方式の後、多読に入るか、それとも始めから多読をさせてTOEICを受験させる時期を遅らせる方が有効かは議論の別れる所であろう。後者がSSS 英語多読の理想とする多読講義であるから、筆者のしていることは前者の単純な多読である。社会人でSSS 多読をしてTOEICを受験している人たちの話では、SSS 多読だけで800点位に到達できるが、それ以上は文法復習等が必要ではないかという。SSS 英語多読を推進している（選択ではあるが）受験塾SEGの古川昭夫氏の話では、塾で多読だけをしている生徒と、精読的な英語授業を受けている生徒の試験成績に差はないようだと言う。50万語読ませれば、400点、100万語で450点、200万語では550点位取っているようだという話も聞いた。もっともSEGは東大理系への入学人数が16年度入試で一位の塾で、生徒達の学習能力ないし意欲はハイレベルと言える。実は915点の学生も多読はしていないがSEG出身だった。一方、受験競争的には未開発の学生が主な大学、学校でも、多読は行われている。酒井助教授を会長とする日本多読学会が昨年発足していて、授業方法についてのノウハウ、多読の有効性について検討している。そのような例を引かずとも現実に山口大学で、

TOEIC 400点未満の学生で、遅い訳読速度の毎分60語から直読速度の毎分130語に上がった例をみると、有効なのは間違いないと思う。さらに楽しくなったとアンケートに答えていたのは非常に重要である。少なくとも山口大学入学者のレベルでは問題ないと思う。筆者個人について言えば、従来型の日本語を介在させる学習法は楽しくなく全く向いていなかったと思う。我儘といえばそれまでだが、映画でPick it up to get out here. という表現を聞いたりすると文法を習ってから英語に触れるより、英語にたくさん触れてから文法を整理した方がいいと強く思う。しっかりした国語力があれば、辞書を引かずとも、単語の意味はふっと浮かんでくる。酒井助教授が著書で指摘するように英和辞書の訳語には問題がある。全員が多読するだけで、意味が分かるようになるかという疑問は当然起こる。期間を区切れば確かに個人差が出るだろうが、何も同じペースで走る必要はないし文法書で整理させれば問題は生じないと思う。

榊原英資慶応大学教授（元大蔵省財務官）がNHKの英語放送「英語でしゃべらないと」で日本語を介さなければ英語が学習できない位なら、止めた方がいいとしていたが、一見冷たく聞こえても補助輪をつけてはいつまでも自転車に乗れないのは事実である。

「英語だけで学習していけば、（到達レベルは違うが）誰でも英語ができるようになる」と学習戦略を説明しても、いつまでも日本語にこだわる者は、大学であるから本人の選択として置いて行くのも止むを得まい。大学入試センターリスニング試行テストを聞いてみても明らかであるが、『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想に従って文部科学省も既に見切り発車しているのであろう。英語が使える日本人の大学の入学案内、ホームページにあらかじめ大書しておけば、受験生が受験時に考えるであろう。逆に英語を必修

科目からはずすという選択もありうるであろう。履歴書に TOEIC の点数を書かなければ、面接してもらえない時代である。大学省令が何かが許さないなら、変更を願い出るしかない。その上で全ての学生に英語の授業を選択させるのは、英語教員というより、学生が所属する学科の教員の責任であろう。

単位があるかぎり多読講義導入が躊躇される理由の一つにどう成績評価するかという点がある。本当に読んだか証明できないというのである。多読講義をするならば、酒井助教授が電気通信大学でしているように全部出席したら優という方式で行くしかないのか。山口大学では、教員の勤務時間が裁量性であるように、学生によく説明したら、学生も英語に関しては裁量性でいいのではないかと思える。TOEIC を受験すれば一応結果が出てくるのである。受けた TOEIC の点数で優良可をつけるのも難しい。TOEIC の運営にかかわってきた北岡俊彦氏によると TOEIC の点数の上下を絶対視するのは問題で、誤差を考慮すると100点以上の変化があれば英語力が向上したと信じて良いことになるそうである。境界線をどう引くのか難しいであろう。

どうか多くの学生が多読できるだけの本の整備をお願いしたい。データが不足であると言われても、多読と多聴は3大栄養素に等しい英語学習に欠かせないものである。実際に SSS 英語多読では、英語が苦手だった社会人が100万語どころか1,000万語(概算だが)読了している例が何名も報告されている。厳しい情勢下ではあるが、傾斜生産ならぬ傾斜配分してゴーサインを出す価値は十分あると思う。そんなに予算はかからない。この場合予算を集中して一挙に整備してはと思います。1つ問題点がある。それは休暇中に多読をすることが困難なことである。せっかくの休暇が、バイト、クラブ活動だけではもったいな

い。活用させる必要がある。山口大学に多読本を置くだけでは問題は解決しない。多読本を設置していない他大学にも、もれなく呼びかけて(最初は中国四国九州地区だけでも)、帰省学生が帰省先の大学図書館を利用しあえる環境作りが必要である。しかしそれでも大学のない町に住んでいたなら事実上無理である。究極的には、酒井助教授や伊藤サムさんが文部科学省に提案した「中学高校に多読本を設置すること」を大学が連合して後押しすべきである。そうすれば大学でもより高レベルの英語演習ができるはずだ。

結局 SSS 英語多読の一番の特徴は、リラックスして楽しく行うということである。一部の日本人が英語をしゃべればそれで何とか済んでいた時代はとうに過ぎた。少なくとも英語を好きにさせるのに SSS 英語多読方式は適していると思える。SSS 英語多読について誤解している面が多々あると思う。御関心のある方は、酒井邦秀助教授の著書を読まれるか SSS 英語学習法研究会(日本多読学会)に直接御問い合わせ願いたい。今回、仕方なく厚かましいのは承知で投稿したが、学外の方にも大学の紀要ではあるがこれから投稿を依頼してもいいのではないかと思う。また、今回の多読授業は、山口大学英語教員の先生方の英語教育に対する深い理解と積極性があればこそ実現したと思う。終わりに、多読授業の開始にあたって御尽力いただいた渡邊正大学教育センター長、岩部浩三大学教育センター主事、宮崎充保国際センター長、武本テイモシー経済学部助教授、学務部の方々、学生への直接の働きかけを可能にいただいたメディア基盤センターの方々、多読法を紹介していただいた北岡俊彦氏、誰にでもできる多読法を発展させた酒井邦秀電気通信大学助教授はじめ SSS 英語学習法研究会および日本多読学会の方々、参加して楽しんでくれた学生諸君に感謝する。では、SSS 英語学習

法研究会の学習者掲示板に会員が投稿して締めるときに使う挨拶で終わろう。山口大学で英語を楽しむことを覚え、異文化交流できる

学生が一人でも増えることを祈って、では、
Happy Reading!
(医学部保健学科 助教授)